

議 事 録

会議名	令和2年度川西市総合教育会議(第1回)		
事務局(担当課)	企画財政課		
開催日時	令和2年9月24日(木) 15時00分から16時30分		
開催場所	川西市役所 4階 庁議室		
出席者	委員	川西市 越田市長 川西市教育委員会 石田教育長、服部委員、坂本委員、治部委員、佐々木委員	
	関係職員	石田総合政策部長、大西教育推進部長、中西こども未来部長	
	事務局	総合政策部企画財政課 今岡課長、足立	
傍聴の可否	可	傍聴者数	1人
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1 開会 2 議事 教育課題への取り組みについて 3 その他		
会議結果			

会議経過

発言者	発言内容等
事務局	<p>それではただ今より、令和2年度第1回川西市総合教育会議を開会いたします。開会にあたりまして、総合教育会議の主宰者であります越田市長からごあいさつをさせていただきます。</p>
越田市長	<p>皆さん、本当に今日は貴重なお時間ありがとうございます。日頃は子どもたちのため、教育行政を支えていただくという立場から、本当に様々なご協力をいただきましてありがとうございます。常に教育長とも申し上げておりますが、川西のこの教育委員会の委員の構成は、日本の中でもベストなメンバー構成をしてるんじゃないかと、任命している立場として勝手に自負をしております。</p> <p>ただ、今回は本当に私も教育長に大変負担をかけ、教育委員会の事務局にも負担をかけているんですが、やはりこのコロナ禍の中で、教育をどうしていくのか子育てをどうしていくのかということは、私たちにとっての、大人たちにとっての本当に大きな責任だと思っています。良いこともあって、ICTの活用なんていうのは3年かかってできるかなといったものも1年で一気にやっちゃおうとか、新しいチャレンジをどんどんしていこうということの反面、子どもたちの大切な体験であったり思い出作りであったり、学び以外の部分、学習以外の点がやはり大幅に削減をされていくと、これが本当に子育てとしていいのかと、そういったことを悩みながら、この半年間コロナ禍で過ごしてきました。私自身は、これ公言してるんですが、今様々なコロナ対策の予算を本当に大きくやっているんですが、優先順位を圧倒的に子ども・子育て世帯と決めています。これ何で決めているかという二つの理由がありまして、一番の今回の被害者というところであれですけど、やっぱり割を食った世代は完全に子どもたちです。学校行けない、本当に思い出なくなった、こういった子どもたちをもう一回チャンスを与えていくということが私たちの使命であるということ。もう一つが、やはり今回予算が国からたくさん来てるんですけど、基本的に国の借金なので、借金をしたそのお金というのは、せめて子どもたちのために使っていくのが、せめてもの今の私たちの世代の責任じゃないのかと。ただやっぱり使った上で、10年後20年後、彼らが大人になったときに、クレジットカードの明細書が来て、なんやこの使い方、頼んでないよ、と言われないように、しっかりと大切に使っていきたいとは思いますが、そういったことを今考えていきながら、教育長とずっと協議させていただいております。</p> <p>今日も様々な提案をいただいているのを協議させていただく場所だと、楽しみにしておりますが、前回からシナリオが全くないという状況の中で、非常に今日はプレッシャーを感じながら、楽しみにして参りましたので、どうかよろしくお願いいいたします。</p>
事務局	<p>これよりの会議の進行につきましては、越田市長にお願いしたいと思っております。よろしくお願いいいたします。</p>
越田市長	<p>という振りになりましたので、この後は私の方で議事進行させていただきます。まず教育課題への取り組みということでございますので、教育長の方からご説明をお願いいたします。</p>

発言者	発言内容等
石田教育 長	<p>はい。今回教育課題への取り組みということで、教育委員会委員の方と協議して、三つの柱で考えております。一つ目は、黒川の里山体験学習を中心とした川西市の体験学習における取り組みについて、ということです。二つ目が、幼少期からの成育と教育、保育ということで、子どもの福祉や手厚い子育て支援などを結びつける体制づくりについて、ということでございます。三つ目が、先ほど市長からのご挨拶にもありましたけれども、このコロナ禍の中でICTがツールとして入ってくると、それによって伴う学びの多様性についてということで、三本柱で意見交流などできればと思っていますので、よろしく願います。まず第1点目の、里山体験学習を中心とした川西市の体験学習における今後の取り組みについて、服部教育委員からよろしく願います。</p>
服部委員	<p>はい、よろしく願います。先ほど日本一の教育委員会とっていただいた、その中の一人の服部でございます。よろしく願います。私の方からは、先日、市の方で「黒川を中心としたまちづくり方針(案)」というのが出ました。それと整合させて、体験学習をどう位置付けるか、というようなことから考えています。「黒川を中心としたまちづくり方針(案)」への提言ということで、一つは、その開発地域の自然文化資源の把握をもう少し調べるべきじゃないか、どういうものが資源になっているのかということをもっと少し触れた方が良いのかなと思いました。文化資源としては、例えば炭焼きというのは、川西ではまだ指定されていないのですが、全国的に見ると備長炭は文化財指定されています。文化財指定に持っていくということが重要です。今西さんの菊炭や大谷鉱山とか昔の鉱山跡も含めて、もう少し資源を活かすということが必要かと思えます。それと、「ちまき」ですが、実は川西のちまきってというのは全国的に非常に珍しくて、これも日本一のちまきと私が言ってるんですけど、そういう重要なちまきもあります。実は宝塚市に先を越されてしまいましたが、宝塚市ではその「ちまき」を2020年3月に文化財指定しました。そのような資源を元に川西では、4年生の里山体験学習というのをやっています。実は今、県教育委員会にも籍がありますので県教育委員会にいろいろ聞いてみますと、川西市で4年生の里山体験学習をやっているということは知られていません。県は体験学習ということで、小学校3年生、5年生、中学校2年生と体験学習をやっているんですけど、川西がさらに体系化して3、4、5年生とやっていることが、なかなか知られていませんでした。そういう中で、資料はついておりますが、兵庫県の発行した「兵庫の教育」の中で川西市の野間先生が、川西の体験学習について非常に上手くまとめられておられ、私としてはたいへん嬉しい思いをしています。それと同時に、教育長が「地教委めぐり」の中で、川西の体験学習のことをきちんとまとめられておられます。こういうことで少しずつでも川西がやっける体験学習の優秀性を広げていきたいと考えております。</p> <p>体験学習がなぜ重要なのかといいますが、小学校3年生の体験学習は、その小学校区内の自然を学びます。4年生になりますと、その地域を越えて川西市内のもっとも優れた自然、台場クヌギがありブナ林がありエドヒガンがあるというような、素晴らしい自然が残っている黒川において様々な体験をして、いろいろなことを学びます。それらの体験学習がふるさと川西の意識づけになることが重要なのです。子どもたちにふるさと川西を意識づけるためにも、子どもたちに日本一の里山を学習させる</p>

発言者	発言内容等
	<p>ということは非常に大切なことだと思います。ただ、これは県がやってる事業ではありません。川西市が独自でやっている事業なので、予算的にもなかなか難しいところもあると思うんですけども、体験学習が非常に少なくなったコロナ禍の中で来年度はぜひ実行したいと考えております。</p> <p>次は 2 ページ目に参りまして、黒川における交流と連携ということで、黒川の交流は黒川の人たちだけではなくて、川西市民全員が交流していくということです。そのためにも里山体験学習というのが有効に効いているだろうと思います。それから 2 番目は地域資源を生かした環境体験学習の充実ということです。4 年生の里山体験学習というのは、今言いましたように黒川ので地域資源を生かしたものです。小学校 3 年生の環境体験学習というのは、その小学校区内の自然資源を子どもたちに学ばせています。今現在、小学校区を越えて、少し遠い所にも出掛けていますが、その地域内で完結するというのが本来の目的です。その時に一番問題なのは、その子どもたちを指導してくれる方々がおられるかどうかということです。それは兵庫県下の他市町でも同じ問題が起きています。山に行った場合、子どもたち 10 人から 20 人に 1 人ぐらいの指導者がいらしますので、指導できるボランティア団体が存在するかどうかです。川西の場合は非常に幸せなことにボランティア団体がたくさんあります。だいたい川西には 20 団体ぐらい、自然環境系の市民団体があるんですけども、そうすると 1 校に 1 団体ぐらいはあります。現実に、水明台や清和台他では環境体験学習において多大な効果を上げておられて、非常に良い状況になっております。団体によって支えられている環境体験事業が川西では非常に有効に機能しています。このことについて、教育委員会としては深く感謝しなければと思っています。あともう一つは、そのそれぞれの市民団体の活動している場所が、実は文化財として見るとものすごい価値があることがわかり、それらをエドヒガンの水明台それからシロバナウンゼンツツジの清和台という形で天然記念物指定しています。そうすると市民団体の方々が、自分たちが子どもたちに教えている自然が誇るべき文化財指定ということで、より強く指導していただけることがわかりました。先ほど市長が日本一の教育委員会と言われておりましたけれども、小学校 3 年生、4 年生は、日本一と思います。小学校 3 年生の環境体験学習は、兵庫県だけです。間違いなく兵庫県一とは言えると思います。</p> <p>それから 3 番目ですが、実はちょっと離れて校内の自然環境の整備ということで、今回コロナのために環境体験学習も里山体験学習も自然学校も、なかなか行けなくなるというような状態です。その時に今、自然学校に要請があるのは、学校に来てくれないか、講師が逆に学校に来てもらって、その講師が学内の自然を教えてください。なかなか外に行けないので、せめてそういう形でできないかっていう、そのような要請が自然学校にはあります。そうしますと、校内の自然環境、どこの小学校も必ず樹木は植えておりますので、そういう樹木の重要性というのが出てきています。しかも非常に身近な存在なので、その重要性というのは別にコロナ関係なく重要じゃないかと。ところが、この前事故がありましたように、その樹木は毎年毎年巨木化します。今これが六甲山で問題になっていますが、巨木化したときに、時間当たり 100 ミリの降水量があった場合に耐えられるかどうか。それはもうどこでも同じ問題で、街路樹にしても、それから公園の樹木にしても巨木化していきます。この巨木化していくときに、学校の用務員さん等の管理でも無理であると。そうすると、その学校にある自然の財っていうのは、財産であると同時に負の財産的な面もありますので、負の部分をやっぱり、良い方向に持っていくということが非常に重要です。それはこの毎日の体</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>験学習に繋がっていくということで、できれば校舎の中で樹木の伐採整備と同時に校内にどんな樹木が生えてるのか、どんな自然があって、それを子どもたちにどう教えたらいいのかというような調査を含めたものが、今年度中にできればなど考えております。今申しましたように4年生の里山体験学習、3年生の環境体験学習は、全学年を通じた校内での自然学習というのが、体験学習として今後非常に重要になってくるだろう。というのが、私の考えです。以上です。</p> <p>ありがとうございます。これヨイショとかではなくって、おそらく私自身もこの2年間市長として服部委員といろんな協議をさせていただいて、私自身も黒川の環境学習、体験をして自然を感じてもらうことの重要性というのは、おそらく相当理解は進んだと、自分で言うのもなんですが、服部先生を含めた皆さんのおかげかなと思います。</p> <p>私も本当にあっと思っただご指摘をいただいたと思うんですよ。そういった意味でその身近なところっていうのは、学校もそうだと思いますし、公園だと多分同じような課題だと思いますし、もしかしたらその街路樹も実は我々どうしたらいいのか、まだ答えを持っていないまま、ただただとりあえず管理しないといけないので、全部剪定バサバサといって、クレームが。やっぱり市民からすると、目の前のものがなくなっていくということ。ただやっぱり担当、管理部門からすると、もう根上がりはするし、視界は悪くなるしということで、持続可能なまちの中での自然づくりというものが、これは行政施策の部分が大きいのかもしれませんけど、ちょっと必要なのかなというのは今服部先生のご意見を聞いて感じました。公園とか教育委員会としてはまず学校がスタートということでしょうけど。</p>
服部委員	<p>はい、公園街路樹の緑ということに関してもですね、去年兵庫県の事業審査会の中で私が申したのはもう街路樹に高木になる可能性がある樹木を植えるなど。最初に植えるときは、例えば、ケヤキなんかでも数メートルぐらいのケヤキを植えるわけです。それは大きくなるということはあまり考えないので、ちょうど川西の駅前がそうですけれども、ケヤキが巨木化してしまうわけです。巨木化して巨木の状態のまま維持できるのであれば、巨木化させたらいいのですが、結局できないのでバサバサに切ってしまいます。もう県の場合は管理できないような所には高木は植えておりません。ハナミズキやサルスベリのような中低木を植栽しています。ただし、高木を植えてはいけないのではなくて、高木植えるのであれば、それだけ土地的に余裕があるとかですね、例えば公園の中ですとか、そういったところにはそういう高木を持っていくということです。そういう新しい考えを持ってこないと、もうたぶん今までの方式じゃ街路樹管理は持続しないだろうと。</p>
越田市長	<p>子どもたちにとっても非常に重要な課題であると思いますし、個人的にはうちの息子が5年生で、自然学校がなくなったのを私から伝えるときには、子どもが「嘘だろ何でだよ。」と、家庭の中の支持率が一気に下がってしまうということもございましたが、どうですか、保護者の視点から見て坂本委員なんかはお子さんが実際にこういう環境体験の中で育ってこられたと思うんですけど。</p>

発言者	発言内容等
坂本委員	<p>娘がちょうど4年生の里山体験が始まった年、ちょうど4年生だったので、それも始まりましたよみたいな形で保護者としては、何となく行ったな、ぐらいな感じだったんですけど、今下の子が続いてますので、里山体験に行くっていうことが川西のこの黒川に行くことだ、みたいな感覚がなんとなく受け継がれていくんですね。実際今小学生のお子さんでも来年里山やねん、って言うてる子どもさんも何人もいたので、川西でも里山体験をするということは、割と子どもたちのスタンダードになっていく。でもそれがまだ子どもたちの中では川西だけでやっていることがあまり分かっていなかったり、保護者の中でもそういうもんだなぐらいしか思ってなかったりするんで、実は普通にやってるのは川西だけなんだよみたいな。気がきがもう少しあれば。</p>
越田市長	<p>なるほど。教育現場の先生方、教員の皆さん方のご理解というのは。</p>
石田教育長	<p>そうですね、やっぱり川西出身の教員が非常に少なくなってきた中で、黒川を通じて川西の良さを見知ってもらえる良い機会になってるし、非常に熱心な先生方も多いんで、そういうNPOとかボランティアの方と交流することによって先生自らもその学びを深められていると思います。やっぱり広がるというと、その学年その学校だけになってしまうんで、保護者や地域の人を上手いこと巻き込んだような形にこれからも考えていかなければならないと思います。</p>
越田市長	<p>もう少し時代が経って、里山体験をして育った子たちが、お父ちゃんもお母ちゃんも里山行って、黒川そうかお前も行ったんか、という回転になると、地域の本当に定着した思い出とか記憶とかそういう意味ではふるさと意識に繋がっていくのかなということで、服部先生にはまだ足らんとと言われるかもしれませんが、おそらく長いスパンの中で、先を見れば確実に私自身は前に進んでいると。黒川という、あれも私が市議の時の平成14年、15年はあまり黒川というのが、議会・行政の中で発言をされることもそれほどなかったと思うんですが、帰って来たらもう黒川が町の、私のマニフェストに書いておりますけれども、黒川のまちづくりということを担当してきましたので、それは本当に良さを見つけていただいて、磨いていただいたおかげかなというふうに思っております。これだけで1時間やりたいんですけど、教育長からはたくさんテーマありますので、少しこの課題は、本当にこれからも我々としても一緒になって定着、良いものにより磨いていきたいと思っておりますので、続いて、これからもやっていきたいなと思います。では、続いての話題提供をお願いします。</p>
石田教育長	<p>はい、二つ目としては、子どもの福祉や手厚い子育て支援など、幼少期からの成育と教育・保育を結びつける体制づくりについてということで、坂本教育委員からご提案いただきます。</p>

発言者	発言内容等
坂本委員	<p>はい。私4人育てておりましたので、ずっと川西で子育てしてたんですね。やっぱり何となく、子育てしている側からすると、何か相談する方向っていうのはどこの窓口かがちょっとよくわからないっていうところがすごいあって、子どもの発達のことはどこに相談したらいいだろうとか、例えば困っているなっていうこともどこに聞いたらいいのかちょっとよく分かりにくいというのが実際ありまして、子育て支援の場面で、何回かお手伝いをさせてもらっているんですけど、その場その場では相談を受けるんだけれども、その受けた相談をどこかに持っていくっていうことがなかなかできない。教育委員会の中に入れていただいて、やっぱりいろんなご相談やお話を聞かせていただくんですけど、それぞれの問題がそこで困っていることであって、それをじゃあどこに繋げていこうかというところがなかなか上手くいかないというのを肌で感じています。子育てしている側からすると、この行政が縦割りになっていることがあまり関係なくてですね、でも、教育は教育で支援センターがありますよ、この課がありますよとか、福祉の部分でこれがありますよ、っていう準備をされてるんですけど、子育てで困ってる側からするとその枠組みはあまり関係なくてですね、ここに相談したら、何か繋がるわっていう安心感があると、何かここで子育てをしていきたいとか、学校に行ったときに困ったことがあっても何か相談ができるんじゃないかという、安心する窓口があればいいかなっていうのがあって、この教育委員会事務局の相談の一元化っていうところを上げさせてもらってます。一元化したからといって、例えば一つの問題があったとして、これは福祉に繋げましょうか、医療に繋げましょうかというところのその繋げる、こっちはこっちで頑張っているではなくて、繋ぐことがすごく大事だと思っているので、協働できる体制づくりがすごく大事だと思っています。回り道のような気がするんですけど、やっぱり学校で子どもが学びたい楽しく過ごしたいと思う気持ちというのは安心感からだと思うんです。それはやっぱり川西自体が、その子たちをいつでも守れますよという雰囲気とか、そういうシステムがあると、繋がっていくのかなと思って、上げさせていただきました。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。そこは問題意識一緒で、上手くイメージが共有、私自身も教育委員会の皆さんとできなくてあれだったんですけど、マニフェストで実は子育てコーディネーター事業というのを入れているんですよ。どんなイメージかという、ケアマネさんみたいな人が要るんじゃないのと、初めからホームヘルプサービスを受けたいって思っている人は別に良いんですけど、何か俺買い物しんどいねん、といった時にこんなサービスあるよ、こんなサービスあるよとか、いやまずは認定受けなはれ、とかそういったことをずっと気にかけてくれる人がいないと、たまたま近くに親がいる世帯はいいけど、来た場合にちょっとしんどいなっていうのを感じてるんですね。僕もどこ使えるかっていうとどっからやろうと、保健センターの乳幼児健診の業務があり、そこで発達検査とかがあって、そこで何かこう気になると言われたら、さくら園とか相談に行っ、そこから支援のところに行く。けど自分で助けてってそこに行かないと、こんなところの事業所があっお手伝いいただけるとか、こういう課題に対してはこうしたらいいんじゃないとか、でも困ってる本質は実は生活の部分かもしれないとか、そこをちょっと誰が、でもこれ保健師さんが見たらいいのか、チームをつくってコーディネートチームをつくらないといけないのか。とかっていうことが私も描き切れなかったんですけど、相談窓口っていうのが現実的かなっていうので今悩んでいますという、ところが教育長ともどうしようかって言って本当に、それこそ議会の中でもやっ</p>

発言者	発言内容等
	<p>ぱり児童発達のところはやっぱり教育・子育て施策としてやるべきじゃないとか。そうすると教育長、どこまで範疇になるねん、子ども範囲全部教育長かという、またそれ本来行政としてしないといけない児童福祉の部分、って本当に教育委員会を設置した目的と違うよねと、本当に政治が関わらなくていい場所という意味の教育委員会としての機能とズれるかなということが大きくても小さくてもちょっと間に合わんなあという。こめちゃくちゃ悩んでいるんですけど、それこそ佐々木委員や治部委員にもお聞きしたいんですけども、子どもの発達の関係からサポートする立場として、どういうことに実際親御さんやお子さんが悩まれているという、実際現場で見られたものって。</p>
治部委員	<p>そうですね、例えば学会とかで発表されているデータでいうと、母子関係のアタッチメントを4つに分類するという考え方があるんですが、その中で安全型と言われる子どもたちはだいたい60%から70%って言われることが多いんです。アタッチメントが乳幼児期のころにもし上手く確立されないと、その後の対人関係や精神面とかでちょっと不安定になると言われているんです。となると、アタッチメントが安定型ではない子どもたちをどうやって見極めてサポートするのが難しいなと常々思いますね。もしかしたら検診等で、サポートがあることが望ましいお子さんのリストに名前が挙がらないかもしれないと懸念しています。どうやってアタッチメントの不安定な子どもたちを早期に見つけられるかが、ママさんたちを救う手立てになるのではないかなと思います。やっぱり保育士さんや保健師さんの協力は必要かなと思ってます。</p>
越田市長	<p>弁護士というお立場で、私も相談があるときに、今言われてももう手遅れやで、みたいなのがたぶんいっぱいあるんじゃないかなと。</p>
佐々木委員	<p>そうですね、坂本委員ご提案のところの相談窓口の一元化っていう観点から言いますと、確かに行政としてもその専門分野の縦割りになりがちなんですけども、その部署部署を繋げるプロジェクトチームなりワーキンググループなり名前は何でもいいんですけども、何かこうケースになったら最低そのくらいは共有できるといいですか、それでも救えない部分もあると思うんですけども、何か横をつなぐ柱をもうちょっと太くする仕組みがあったらいいかなと考えております。</p>
越田市長	<p>どうですか、行政側として肌で感じていると思うんですけども。</p>
中西部長	<p>今市長からお話あったように、いろんな場面で相談がありまして、当然その相談の場面では横の連携をしながら情報は共有して相談にのっております。ただ、それは場面場面ですので、子どもを生まれる前から、成長していくに従ってずっとどこかの部署が状態とか、或いは状況も含めて見れているかという、そこができていないところかなというふうに感じております。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>これは非常に大きな問題ですし、ただ、昔はおそらくそれは地域のご近所さんが見れたりとか、もしかしたらそんなに複雑ではなく解決できたのかもしれないんですけど、非常に多様化をしている。我々も私も親世代ですけど、必ずしもそのサポートを受けて育った、イメージをして子育てに入ったっていうよりも、なんかやりながら考えてるけど、誰も実はあまりできてなかったりとか、最近やっぱり、僕らの時代に比べて子ども同士が家に行き遊びに行き、誰の子かわからんわって言うけど何かみんなの子、みたいなものは確かにこの10年20年で急激になくなってるとかなど。そうした時にちょっとした友人からのアドバイスみたいなのもちょっとできない。ということで、やはり窓口。教育長、どうですか。</p>
石田教育長	<p>今提案があったように、一つは相談部門の一元化ということで、教育委員会の事務局の中だけでも相談部門が三つあると。そこが横に連携してたらいいんですけど、現象によって分けられてしまっているけど、根っこは実は一緒かもしれない。だからそこら辺のところをやっぱり一元化というワンストップがいいのかどうかかわからないんですけど、共有する必要はあるのかというのと、これは市長とお話した時も本当に大きい問題があるんですけど、教育っていう境界線があいまいになってきている。もちろん教員の働き方改革の案ですけど、チーム学校という言い方をされるのはきっと教育の専門家だけでは対応できない時代になってきているんです。だから福祉の専門家であるスクールソーシャルワーカーが入ったりとか、してくるということで、市長の言われてる問題はその通りで、だからと教育が全部担うのは難しい。それはそれでまた課題もある、とってどう連携していくのかなというところ。この福祉と健康と教育がどっかで交流して協働できるようなシステムを考えていかないと、子どもの貧困であるとか、虐待であるとか、そういった問題は現象面での解決や理解にしかないんじゃないかと思ってるんです。大きい問題ですし、これから向き合っていくかといけない問題になると思います。</p>
越田市長	<p>坂本委員がいろんな自治体に行き、研究していただいているという情報もキャッチをしているんですが、良い事例、こんな面白い、みたいなことはありますか。</p>
坂本委員	<p>まとめられたものを見ると確かにこれはいいと思うし、実際そこに住んでおられる方の話を聞くと、そんなにすごく変わったわけではないとか。やっぱり大阪府だとLINEで相談ができて、今困ってるのがすぐ聞けるっていう、日にちは決まってるんですけどね。そういうのがあると、やっぱり私子育てしんどいけど誰にも、積極的なお母さんばかりじゃないので、子育て広場に行けるアクティブなお母さんは文句言ったり愚痴言ったりができるんですけど、そこに行けないお母さんたちはLINEであったりとか、SNSに走ってしまうとネガティブな情報がどんどん入ってきてしんどくなるので、ちゃんとした情報が来るようなLINEであったりとか、そういうので助かってるとい声は聞いてました。あとは、医療と学校が繋がっていくと、やっぱり子どもさんへの対処が先生によって少し変わってしまうとしんどいので、スーパーバイザー的にお医者さんが意見を言ってくれたりとかそういうやり方もあるかなと思います。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>イメージとして親や子どもが動いて相談先見つけて、ここで説明した説明されたで、次のところに行ったらまた同じ説明してと、市民からすると、ここで言ったことをこっちに流してくれれば本人やから構わないで、というの、何か縦割りになっているのか、結局これ別にルールであかんとっているわけではないものもあるんで、個人情報個人情報って言うんですけど、本人情報ですから、本人が良いって言ったら良い話で、同じ話するんですから、その中で、1枚のカルテじゃないですけど、これだけIT化が進んでいけば、紙ベースで持つとかじゃなくてもどっかでクラウドの中に入れてくみたいなのも本来できるかなと思いますから。コロナで一個良かったなと思ったのは、ICTをもっと活用しようよっていうすごい風土ができてきましたので、そういったことも含めてちょっと考えていきたいなと思っています。今はアクセル全開で踏んでいますので、いろんなものに予算がつくという、そんな時期かなと思っています。ありがとうございます。特にそれぞれの立場もあると思いますので、引き続き組織のあり方は、健康分野や障害分野で、もしかしたらこれは全然言ってないですからマジかって思われるかもしれないですけど、何かもう1個ぐらい間に部を作った方がいいのか、なんか外した方がいいのか、外してそれこそクラウドみたいな、法律上できるかわかんないですけど、どういう形が良いかっていうのは、ちょっと協議をさせていただきたい。ただ方法としては、行政の効率性の内部管理の部分と、子どもたちを真ん中に置いた発想みたいなので、進めていきたいなと思いますので、またある程度素案みたいなのができたら、ご協議をさせていただきたいというふうに思います。</p>
石田教育長	<p>それでは今話題に上りました、今回コロナ禍というのもあり、GIGAスクールという考え方の中でタブレット等の整備についてかなり踏み込んだ取り組みをしていただいているところです。そういったタブレットも含めたICT環境を整える中で、学校教育の学びの多様性について対応する必要があるんじゃないかという問題提起を教育委員の方々からいただいています。まず、個別最適化の学びについてということで、治部教育委員の方から、よろしくお願いします。</p>
治部委員	<p>アウトラインだけ皆さんにお配りしていると思います。アスタリスク左側のところに5個あって、僕の今回のメインのテーマが3番目(双方向型コミュニケーション・ツール...Interactive)と4番目(個別最適化ツール...adaptive)なので、そこに焦点を当てたいと思います。5番目(Interactive ラーニング & Adaptive ラーニングは、アクティブラーニングを保証できるのか)のテーマまで意見交換ができれば、個別最適化ツールの活用像をイメージしやすいと考えますが、今日は時間の関係で4番目までを目安としています。タイトルを「学校教育におけるICTの活用を interactive & adaptive の両側面から考察する」と設定しました。3番目のアスタリスクが interactive、4番目が adaptive ということになります。ICT(インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジー)ですが、パソコン、タブレット、デジタル教科書、その他、学習用のソフトをいろいろ導入し始めています。メリット、デメリットあると言われてはいますが、時代の動きとしては少々のデメリットがあろうとも、たぶんICTの活用は進んでいくのだらうと思います。メリットとデメリットにどんなものがあるかを調べてみると、学習場所の自由度や、大勢</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>が集まる場所を回避できるという自由度もメリットとしてありそうです。映像、音声、アニメーション等を活用することで理解が促進されたり、クラウドで資料を共有することで効率化が図れたり等、こどもの学びだけでなく教職員の方々の校務の効率化にも影響がありそうです。個人の学習が個別に最適化されることも挙げられます。その反面、インターネット環境の整備が整わない場合や、手を使って書く習慣が減るという指摘もデメリットとして挙げられます。その他、端末の購入費用やその維持費、あとはICTの操作に関する問題も考えられます。</p> <p>ここからは、双方向型コミュニケーション・ツールについて考えてみたいと思います。例えば zoom やロイノート等が挙げられると思います。人が相互にやり取りすることを手助けしてくれます。例えば、一学年一斉 zoom 授業なんていうアイデアはどうでしょうか。教職員不足の問題にも助けとなりそうな案だと思います。それぞれの教室に子どもたちが居ても、別の部屋に居る先生が双方向型コミュニケーションツールを使って授業を複数クラスに届けることはできないでしょうか？教職員と児童の間で会話や課題の提出などのやりとりをすることができれば、コミュニケーション不足の不安も緩和されるかもしれません。得意科目を教えることで教育の質の向上や教職員の業務軽減につながる可能性が考えられます。</p> <p>市内教職員を対象としたオンライン・シンポジウムも ICT を活用した学びを支えるアイデアとして提案したいと思います。今回、コロナ禍の影響で中止になった勉強会や研修会もいっぱいあると思いますが、zoom 等の ICT ツールを使えば一つの会場に集まることなく学びの機会を提供できるかと思っています。これを研修ではなくてシンポジウム型にするっていうのが面白いかなと思ってます。テーマに沿った意見交換や議論をすることで、アウトプットの要素も含まれると考えます。学校での ICT の活用については賛否両論あると思います。例えば、対面でのコミュニケーション機会の減少とか、生徒が能動的に参加しているかどうか測れるとか。双方向型コミュニケーションツールについて、越田市長はいかがお考えでしょうか。</p> <p>これ実はですね、ここに来るまで私隣の部屋で何をしてたかという、民間事業者 70 社の方対象に、川西市こんなこと困っていてこんなチャレンジしたいから、協力してくれる民間事業者さん募集します、手伝ってくれる方手をあげてくださいっていうのを双方向というか、僕がしゃべってチャットで質問がきてそれに答えるという形式でやっていたんですけど、これはめちゃくちゃ可能性があるというのと、やはり研修に関しては、私県議のときに色んな研修を兵庫県がやってますって言うんですけど、大体多いのは代表者教員の方が聞きに行き、そこで覚えたものをもう一回授業でやりましょうみたいなものは多分多いんですかね。それってプロから聞いて 70%理解して次しゃべったら次の 70%しか伝わらないから、多分理解率 50%ぐらいになっちゃうよねと。もしくはもっと低いと。でもそれをまだ zoom とか僕が知らなかったんで、県議の時にはせめてデータでDVD焼くとかしようよ、とか言ってたんですけど、そんなのしなくても別に zoom で良い先生の講義をどんどん流すっていうことができるので、質問にもその都度答えていけるということですから、これもまたぜひどんどん現場が対応できる限りにおいてやって欲しいなと思うんです。別にコストとしてかかるものでもありませんし。実際一部ちょっと形が違いますけど、川西の市民病院に感染症対策のプロの看護師の方がいらっしゃいまして、教育委員会もご活用いただいたと思うんですが、福祉施設の方とかにも一斉に質問を受け付けますっていう形でこういうこ</p>

発言者	発言内容等
	<p>と気をつけましょうということをやりましたので、これで授業するのは僕もちょっとわからないんですが、実は、休校、緊急事態宣言下でうちの息子も習い事をオンラインでやったんですが、小学校高学年ぐらいになると、いわゆるちょけるっていうかね、親が見てる前でちゃんとやってくれなかったりですね、だから画面半分しか映ってない子がいたりですね、これはなかなかただでさえ、同じ空間でも 30 人をコントロールするって非常に難しいものを 100 人とかになったときに、とても良い授業をやったからといってみんなが聞いているかっていうと、たぶん聞いてないんじゃないかと。もしそれで良いんだったら別に集めなくても、動画で良いよなっていう。双方向ってなんか、可能性はあると思うんですけど、何かまだどうしたらいいのかっていうことはちょっと分からないとか、置いていかれる子たちが、出てくるんじゃないかなと。本来そうであるべきじゃないツールのはずが、使い方を間違えるとそうなる。危険性を今感じながら、ただ、特に教員の皆さんへのプラス部分っていうこれは前向きにやる大人に対しても非常に有効だと思うので、教育委員会で様々な面からやっていく、それこそ法律的なところから福祉的な点から、それこそ自然はこうやって教えるべきだとか、そういうのは実際画像を使ってでもできますんで。</p>
治部委員	<p>授業への参加姿勢を調整できるのか、授業に取り残される子がいるのだろうか等、検討の余地がありそうです。先生方が学校で待っているから、子どもたちの様子を実際に観察できるからこそ、家庭で困りごとを抱えた子や精神的に不安定な子等と繋がっていられると考えることもできます。そういう子たちが学校来なくてよくなった時にどうなるのかという不安な面もあります。子どもたちが ICT を使った学習に家庭から参加しているのかどうかを計るツールもあるようです。web カメラを通して、参加者がどの程度画面を見ているか確認するシステムも始まっているようです。</p>
越田市長	<p>すごい。</p>
治部委員	<p>ツールを活用すれば、家庭からの学習に参加していない子どもを把握できるかもしれません。市販の眼鏡では、個人の集中度合いを数値化できる商品もあるようです。</p>
越田市長	<p>最初に言っていた、やるかやらないかの是非論はもうすでに勝負つきましたと、勝負ついてメリットは活かすけどデメリットで不安に思うところを解消していくとかそれは、さっきおっしゃったような ICT の部分のデメリットをさらに技術でカバーをするという部分と先ほどの対面のコミュニケーションの力だっているのであれば、それはまた別のカリキュラムにおいて、それこそ自然体験の方で少し重視するとか、こっちの方でやるという全体パッケージの中の一つのツールとしてエッジが立つというか、各いろんなところができるというイメージを持たないと、こう 0 か 100 か是非かっていう話をするのはあまり健全ではないかなと思います。</p>

発言者	発言内容等
治部委員	<p>個別最適化する adaptive については、双方向でのやりとりというよりも、コミュニケーションに関しては一方通行なニュアンスです。個別に最適化されているのでその子に適切な難易度だったり、必要なカリキュラムを提供できることがメリットだと思います。実際 atama+さんやキュビナさん等、AI人工知能を使った学習プランを提供している企業が学習支援ツールを発売しています。ここで、学びを多側面から考察した、学びの四面体モデルを通して個別最適化ツールを考えてみたいと思います。子どもの学びを4つの側面から見た時に、1つ目が学ぶべき内容についてです。カリキュラムや教材についての側面で、学習指導要領にあるカリキュラムだったり、音声や3Dの動画が付帯する教材などがあたります。二つ目は、学びの基準で、課題設定と難易度が該当します。ここはまさに個別最適化ツールから恩恵を受けることができる領域だと思います。例えば小学4年生の児童で、国語は小学3年生相当、算数は小学2年生相当が適当な場合に役立つはずで、三つ目が、学び方教え方、レクチャーなどについてです。双方向型コミュニケーションツールを活用したイメージについては先ほど提案いたしました。これを個別最適化するツールを使った時に、どのように学びに影響するのか今後検討していきたいと思います。最後が学習者の性質です。各々の個性、現在の知やスキル、あとは動機付け等もこれにあたると思います。個別最適化ツールを含むICTが、学びを包括的に保証できるのか、また、学習への動機付けはサポートできるのか等も議論するポイントかと思っています。</p>
越田市長	<p>これは、部長の肌感覚みたいなのも教えていただきたいんですけど、非常に教職員の皆さんの仕事というか、役割が変わってくるんじゃないかなと。昔はやっぱりそれこそ10年20年前どんな議論があったかと思えば、やっぱり教えるのって塾の先生の方が上手いから塾の先生に教えてもらった方がいいんじゃないの、いやいや、学力だけが教育の全てじゃないからやっぱり教員じゃないとできないものがあるんだ、というこの議論がまずあって、でももう動画とかそういうのがあるとやっぱり塾の先生に勝たれへんから、子どもたちの現状を見てどんな教材が良いか、導いて進めていくっていうのが、ある種コーディネーター的な役割になると。ただ、AIができてしまうと、どの教材が最適かということは、もはやAIの方が優れてしまうんじゃないかという。ただ、やはり教員の皆さんもこれ我々もそうですけど、その化学技術の進歩とプレイスタイルの変化というのはなかなか一致しないんじゃないかなと。今特に若い先生が比較的対応もするのかもしれないんですけど、実際ICT化がどんと入って新しく変わっていくって言ったときに、学校現場はどういう感覚を持っているかとか、どう変わりたいみたいな議論とかがあってあるんですかね。</p>
大西部長	<p>やっぱり両極端な意見が学校現場でもあると思うんですけど、だから私たちも今回のようにコロナがなければ、もっと時間をかけながら、進んでいたことだったと思うんですが、この機会が良かったのか、この件に関してだけ言えば、進むきっかけになったとは思いますが。やらざるを得なくなったところからはじまったにせよ、若い人を中心にどんどん取り入れていながら、だけど学校でしかできない集団での学びとかを大切にしながら入れていくというか、全てAIに任せるとかそういう発想は多分、学校現場には永遠にないと思うんですけど、上手く取り入れながら、それぞれの子どもたちに応じた、集団だけではなくて個別の学びにも、同時に入れていくみたいな発</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>想になっていくんじゃないかと。</p> <p>以前神戸新聞にですかね、福本校長先生、PTA改革なんかでも我々もお世話になってる先生がやはりICTという箱が変わっただけで、対応してICT化するわけじゃないよという、そんなメッセージを出していただいたんですけど、僕ら行政側からするとどうしてもその効果はどうなんだ、すぐ100%つけないよ、みたいな雰囲気になるんですけども、ぜひ学校現場においては、いきなり100点満点ではなく、まずは持ち帰って宿題に活用するとかってそこがもししたら先生がプリント焼いて印刷して配ることより全部テキストをデータでやって、答え合わせ勝手に機械がやってデータだけが先生に送られるっていう方が、もししたらいいのかもしれない、そこからスタートするとか、何かこう段階的に。今回購入しましたので、おそらく数年間、ノーコストでできますから、それをさらに大体5年ぐらい使うとして、その先にこういう使い方ができてるんだという、イメージを持ちながら、その頃には全く違う技術になっているかもしれないのはちょっと怖いところですけど、何かそういうことで、一つずつ無理した結果が我々大人がしんどかったらいいんですけど、結局子どもたちがしんどかったら意味がないので、あくまで道具、ツールなんだということでぜひ教育委員会の皆さん学校現場そういう意味でサポートしていただきたいなと私は思います。課題も私も感じていて、子どもの話を公式の場所ではいいか分からないんですけど、某大手企業のタブレットでやる学習の教材うちもやってるんですけど、やっぱり一つ一つこう解く時となんかもう単なるなぞなぞの当てものになって、1じゃないから2にしたらこれ正解したと、早く次行こうということにならないように、本当にメリットをちゃんと活用する部分と、やっぱり本来考える力をつけないといけないところを、そこが代替できないところもあるというデメリットというより、代替できない万能ではないということなんだろうなと思います。</p>
石田教育長	<p>最後になるんですけど、今もちょっと話しがあつた学校に行かなくても学校の授業、学びができるんじゃないかということで、不登校の児童・生徒への対応を含めた学びの選択肢という意味での提供ということで、最後ですけども、佐々木委員、お願いします。</p>
佐々木委員	<p>ICTのお話は出尽くしたかなというところなんですけれども、ICTを使った教育をこれから進めていかれるうえで、今回のコロナ禍で休校期間ということで、必要性が意識されてどんどん進んだという面もあって、結局考えてみると、学校に行けないっていう客観的な事情で行けないっていうのも当然ですけども、主観的に、どうしても学校に行けない不登校のお子さん、それは主観的に行けない場面でも同じように、ICTを使つての学びの高い学びの選択肢を提供することができるんじゃないかという認識でいます。先ほど部長おっしゃっていたように、コロナがあつたから急激に進んだっていうのがあって、じゃ、4月5月6月である程度みんなの意識が高まって進もうとしたところ、今どうなのかって言ったら何かちょっと足踏み状態っていうか、検討する機会のこの会議も含めて、場面場面でありますし、みんなの意識の中にあるんでしょうけれども、大学教育などの現場ではもうオンラインが今でも主流なところが多い、</p>

発言者	発言内容等
	<p>大学の教員は否が応でもICT教育を提供する技術を向上させられたという形になってます。小学校中学校の教育現場がどうなのかなと思ったときに、ちょっと遅れではないですけども、ちょっと大学教育の現場とは違った進め方をしている、同じぐらいの勢いで進んでいってもいいのかな、せっかくここまで意識が高まっているのをちょっとこうスピード感は持ってもいいのかなという気がしています。そうなったときに、その不登校の児童・生徒さんが勉強だけではない面もありますので、バランスですね、先ほどの話も出ていましたように、勉強をどれだけサポートできるかICTをもちろん使えばよくなって、それだけでは対応できないような場面はまた別の場面を設定するというふうに場面場面バランスのとれた対応ができて、そうすると学びの選択肢が増えて結果その不登校の児童さんの生徒さんの学びの機会を失うことなく、貴重な子ども時代を過ごしていけるのかなという認識でいます。要はコロナがきっかけではありませんけれども、広くその学校に登校できないという場面で応用できる今回ICT教育ということで、これからもこういった場で検討を続けていければなと思っています。</p>
越田市長	<p>これはめちゃくちゃ期待をしている取り組みです。おっしゃっていただいた通りいろんな事情がありますし、私も教育長もずっとこの2年間議論している協議する中で、共通しているのは、学校での学びというのはやっぱり学びのメインだろうと。ただ、何かの都合もしくは他の意思によって行かない行きたくないという子たちは教育を受ける権利が損なわれていいのかということ、そういう子たちも全部包括して学ぶと、それはオンラインも一つだと思いますし、フリースクールという形に川西市内にはないんですけど、それがもう一つの形かもしれない。そういった色々な形を私たちはこれからしっかりと利用していかないといけない。やはり私自身も反省というか市長になって2年経ったんですけど、やっぱり準備してないことをやれって言ってもやっぱり絶対にできないと、危機になればなるほど準備できてないのが全くできないということが、私自身も明らかになりましたし、ここでしっかりと準備しているこのシステムがちゃんと機能するということがわかれば、次は学校が本当にもう1回緊急事態宣言みたいな時になっても応用すれば多分できることになるだろうと。で今回私も著書でしか存じ上げないんですけど中室先生という、非常にエビデンスを持った教育とかそういうことに対して非常に先進的な方なんで、そういった方たちの応援をいただいて、こうするというのは非常に新しい取り組みで、期待をして、これ誰がどう引っ張ってきたんだろうっていうのが、しっかりと手を挙げていただいた教育委員会のチャレンジを全力で応援したいなと。</p>
石田教育長	<p>全国的に募集してるって話も聞きましたので、うちも不登校生徒児童の対応、学びの保障ということが大きな課題でしたので。自治体がすることについては学校教育の色々な思いがあると思うんですけども、やっぱりそれを踏み越えてやっていかないと僕も駄目なんじゃないかなあというのは、そういうふうに思っておりますので、バックアップしていただけるのはありがたいなと。今の時点で市内で10名以上の児童生徒が参加の意思を示して動き出してますので、その結果を参考にしながら取り入れるところは取り入れていきたいと思っております。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>何を成功とするかって言う、その効果はどう見るかっていうのが非常に難しい教育なので、テストの成績とはならないと思うんですけど、そういったところでね、ここはしっかりとしていただきたいし、それを今後ね、自治体でそれぞれ一つずつ持つというのがいいのか。それこそICTなので、全国で何個か拠点があれば別に良いというところかなと思います。それでも里山に自然に誘導されて自然の中で遊ぼうみたいなのがあったり、と色々川西市としてチャレンジ・ご協力する中で、川西の本当にいいところを、川西の実際の教育の真ん中のところをどうしていくのかといったような中で、一緒に伴走していただけたらなと思います。</p> <p>はい、予定通りの、いつもは延長して1時間半になっているので、1時間半が定時かなと思うんですけど、スケジュールが確か1時間くらいでした。まだまだちょっとコロナ禍で私もなかなか皆さんと十分協議できなかつたんですけど、これ突然言いますが、年2回ちょっと少ないですよ。またそんな私も丸2年になりますので、少しこういった場所をよりやって私自身も悩みながらやっている部分もそれぞれの立場からアドバイスいただければと思いますので、どうかよろしく願いいたします。</p> <p>他に何かこの際ございましたら、大丈夫ですか。ということで、これで終わりたいと思います。以上をもちまして、第一回総合教育会議を閉会いたします。皆さん本当にありがとうございました。</p>

以下会議の事項を記録し、相違ないことを認めたので、ここに署名いたします。

令和2年12月22日

川西市長 越田 謙治郎

川西市教育長 石田 剛